

## 自助と共助を融合した日常からの防災の新たな取り組み である「OSUSOWAKE」活動の報告

### A new approach to everyday disaster prevention that combines self-help and mutual aid～OSUSOWAKE activity report～

木村 栄宏<sup>1)</sup>・根本 吉規<sup>2)</sup>・飯田 訓文<sup>2)</sup>・西田 美樹<sup>2)</sup>

Hidehiro KIMURA, Yoshinori NEMOTO, Kunibumi IIDA, and Miki NISHIDA

一般財団法人銚子円卓会議と千葉科学大学危機管理学部木村ゼミは、自助の取り組みであるローリングストック（循環備蓄）を、共助の取り組みに進化させた、日本初の、持続可能な災害支援の仕組みを推進している。この取り組みは、日常から防災意識の高い個人を増やし、食品ロスを発生させずに地域経済にも貢献するSDGsの観点を持ち、更に地域を超えた繋がりづくりにも貢献できる仕組みである。この仕組みと意義、活動を報告する。

#### はじめに

一般財団法人銚子円卓会議(注1)と千葉科学大学は、近年の東日本大震災や能登半島地震など、災害が頻発化・激甚化する中で、日常備蓄を支援しあう新たな共助モデルとしてOSUSOWAKE事業を展開している。この取り組みは、個人が備蓄する食品等をローリングストックとして活用しながら、更に災害時には他地域の被災地に備蓄品を送る仕組みとしたものであり、支援の集中や物資の偏り、食品備蓄の期限切れによる廃棄といった、従来の被災地支援における課題を解決するものとなっている。地域の特産品などを活用し、支援する・されるではなく、お互いがメリットのある形で備蓄・循環できる仕組みである。活動の第4期(2023年11月10日～2024年11月

9日)に於いて、能登半島珠洲市に支援品を発送することができている。この取り組みは、災害対応と地域文化を同時に育む成果が得られると共に、人と人が支えあう関係の可視化が図れ、大学・行政・企業・金融機関など多様なアクターが活躍する持続可能なものである。以下、これまでの取り組みの経緯や意義などを報告する。

#### 1. 背景

仕組みの考案の元々のきっかけは、一般財団法人銚子円卓会議(以下、円卓会議)の根本理事が2019年の台風被害時に県外から多くの支援を受け「共助の大切さ」を改めて感じ、「地域ぐるみで被災地支援ができないか」という思いを、円卓会議と「人を助けたいという人の大学」である千葉科学大学の危機管理学部木村ゼミ生たちが一緒になって皆で詰めていったものである。

一方、この取り組みを進めようとする背景には、以下の3点があった。

第一に、銚子市が自治体として抱える課題である。自治体にとって最大の危機である人口減少(財政基盤の減少)や高齢化、そして産業面でも地域の持続可能性の確保が大きな課題だが、銚子市においては、地域住民の防

連絡先：木村栄宏 hkimura@cis.ac.jp

1) 千葉科学大学危機管理学部危機管理学科

Department of Risk and Crisis Management, Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute of Science

2) 銚子円卓会議

Choshi Civic Roundtable Foundation

(2025年9月30日受付, 2026年1月28日受理)

災意識と寄付文化の醸成が必要と考えられたことである。事実、このとりくみ開始前の銚子市における令和2年度自主防災組織の組織率は千葉県69.1%に対し銚子市は17.8%、全国平均84.1%に対し、郷土の偉人濱口梧陵はいれども低い状態であった。寄付文化の醸成という点でも、ふるさと納税についての意識は高くても、被災地支援や、円卓会議の「この指とまれ寄付プロジェクト」(注1)でも7年間で200万円程度という状況にあるように、市内の取り組みは様々だが幅広い共助の意識は少ないという疑問が生じていた。(注2)

第二に、災害を受けた被災地に対する支援の方法には様々な形があるが、大きな課題もあることである。まず、せっかく善意の行為として災害地に支援物資が届けられたとしても、被災地のニーズと、送りたい側の物品が違うことがあること、次に、災害が起こってから、ひと月・ふた月後には被災地から遠い場所ほど関心が薄くなっていることだ。被災者側からすると、まだ災害が終わって

いない、住む場所が仮の住まいである、ケガやPTSDなどで苦しんでいる、かもしれない。しかし、支援者の心は既に被災者から離れていっていることもある。また、「災害支援」という言葉からはどうしても、「いかに早く支援するか」という視点が重視されるあまり、不要なものや品目の集中や偏りにより公平性等が担保できず、結局支援にならなかったということが生じる。さらに、食品備蓄の期限切れによる廃棄ロスも生じる。

自助・共助・公助のうち、自助と共助を結び付けることで、こうした課題を解消したいという思いから生まれたのがOSUSOWAKEである。OSUSOWAKEは、平常時に備えて、ふだんからの防災について考える機会をつくり、もしもの場合は、復旧復興時になってから暖かな支援を贈り、地域と地域の継続的な関係を大切にしていくものである。

この考え方を地区防災計画の図に沿って示したのが図1である。

## OSUSOWAKEの特長\_\_時期

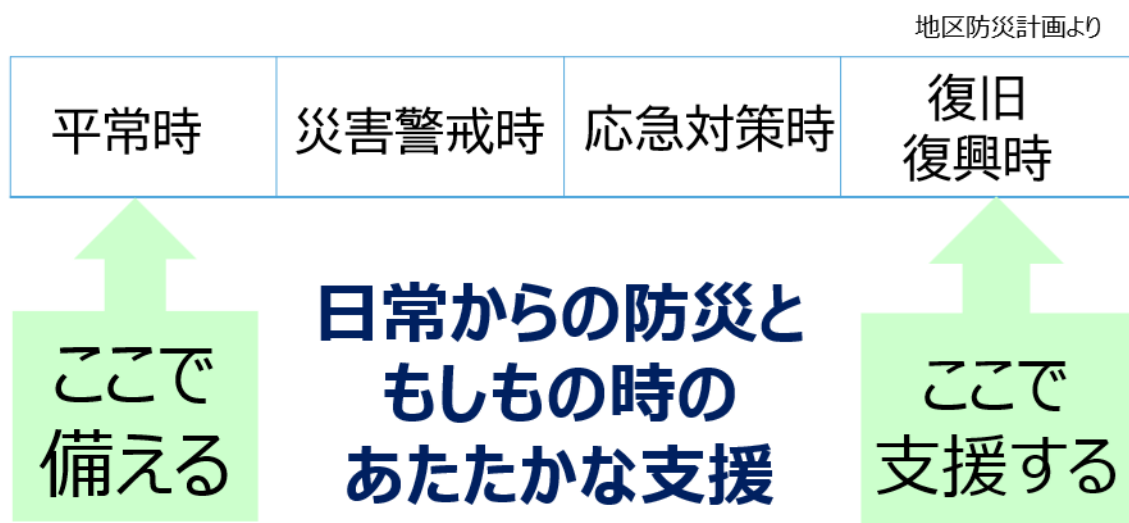


図1 支援する時期

### 2. OSUSOWAKEの仕組み

「必要なものを、必要な時に、必要な分だけ、必要な人へ届ける」無駄のない持続可能な災害支援の取り組み地域ぐるみのローリングストック「OSUSOWAKE」の特徴は以下の3点である(ローリングストックとは、「もしもの時」に備え、無理なく続ける家庭内での循環備蓄で、インスタントラーメンなどでも有名)。

①「一人で自宅に備蓄」するのではなく、参加者皆が地元のパートナー企業(注3)に備蓄する。

②もし事前に協定を結んでいるパートナー地域に災害(災害特別法が適用されるもの)が起きたときには、備蓄品を支援品として送る。

③何事もなければ、参加者の手元に届くので、温かい日常をかみしめながら、また継続して備えておくことが促される。

支援者は一口3,000円でビジネスパートナーの提案する食品(加工品)を選択するが、支援者にとっては銚子の地元企業の食品を予約購入するイメージとなる。概念

備蓄であり、支援された時点の食品企業が用意するわけではなく、必要が生じた際（被災がパートナー地域に生じて実際に送るときか、無事1年間経過したとき）に新品が提供されるため、消費期限切れや廃棄ロスが生じない。

支援品は企業が管理するため、必ずしも防災食品、保存食に限る必要はなく、日常を感じられる「美味しいもの」で癒しの時間を提供することに繋がる。食品の無駄が生じないため、SDGs の目標達成にも貢献する。



図2 OSUSOWAKE の概念図

(銚子円卓会議公式サイト <https://choshientaku.com/> より)

図2に、活動で使用しているわかりやすい概念図を示す。図3は、関係者（円卓会議、ビジネスパートナー、エリアパートナー）の役割位置づけを示したものである。

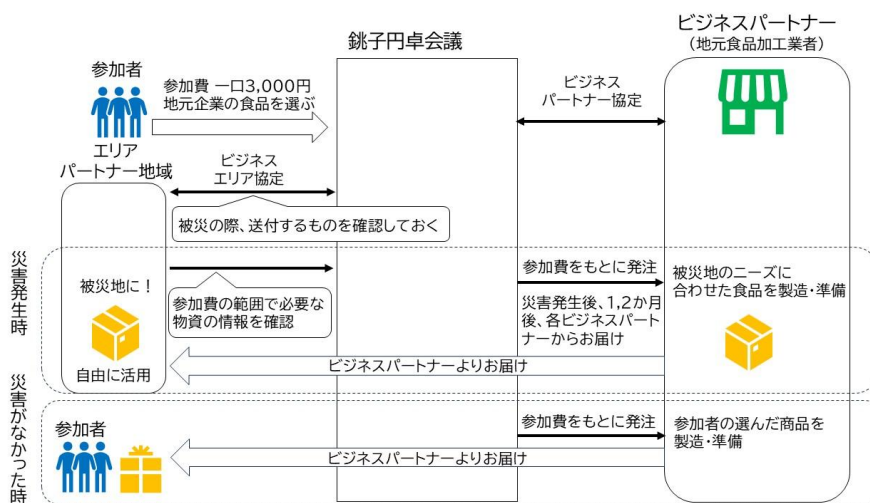


図3 関係者の役割

(銚子円卓会議 OSUSOWAKE ユニット作成)

更に、パートナー地域との継続的な関係構築は、災害時だけではない新しい価値創出の可能性をもつ。

2025年10月現在、エリアパートナーは、千葉県香取郡東庄町、和歌山県有田郡広川町、千葉県香取市、石川県珠洲市の4カ所である。また、ビジネスパートナーは地元企業8社が参加し、支援口数は第1期から第4期に

かけて約500口程度を維持している。

OSUSOWAKEは、共助の大切さを伝えつつ、日常から防災意識の高い個人を増やす取り組みとなる。賛同する地域・企業・団体とともに、地域を超えた繋がりづくりにも貢献できる仕組みである。

図4に、支援者が選ぶことのできる備蓄品を示した。

## ビジネスパートナー/選んでいただける備蓄品



**珈琲**  
andy's COFFEE STAND



**煎餅**  
炭火手焼き 福屋



**木の葉パン**  
お菓子の工房 ダイモン



**ピーナッツハニー・ゼリー**  
富士正食品(株)



**米**  
(有)根本商店



**サバの文化干し**  
(有)磯初



**ハーブティ**  
(株)浜鈴総芸



**コラボ醤油**  
(株)櫻井謙二商店

図4 備蓄品一覧 (2025年10月現在)

OSUSOWAKEは日本語の「おすそわけ」ではなく、あえてローマ字表記としている。ダブルミーニングにもなっており、Operation of Sustainable Utility and Sustainable Opportunity for World of All Kind Everyoneの頭文字でもある。ローマ字にした理由は次のとおりである。従来の「おすそわけ」という言葉は「いただきものや利益を他者に分け与えること」という意味であり、語源としては、余った着物の裾を他の人にわけあたえてあげよう、というように、少し上から目線のニュアンスがある。OSUSOWAKEはそうではなく、支え合いの輪を広げ、日常と災害支援をつなぐ、持続可能な共助の仕組みである。

### 3. 取り組みの意義

次の3点の意義があると考える。

①地域社会への貢献：備蓄品が地元の産品であることから、地域経済及び地域の広報に資するものである。また、市民の日常からの防災意識と寄付意識の向上だけでなく、普段から地域と地域の対等なパートナー関係を育もうとするものであり、有事の際には遠くの親戚を思いやるよ

うな支援が可能になり、更に災害時だけでない繋がり関係人口の増加という新しい取り組みを生みだされ、「やさしさの連鎖」が進む仕組みである。

②SDGsの意義：「大量生産・大量消費」に頼らない、「必要なものを、必要な時に、必要な分だけ、必要な人へ」届ける無駄のない支援モデルであり、従来、備蓄品は利用されないことで廃棄されることが多いが、災害のない年は支援品を全国の参加者に届け、消費される（食品廃棄ゼロ）。また、既存の製造ラインで作られているものを使用するのでCO2排出量を最小限に抑えられる。更に、「OSUSOWAKE」は、銚子発のモデルであるが、全国の地域でも同じシステムを作って共助の仕組みとして発展できる。SDGs9（産業と技術革新の基盤をつくろう）、11（住み続けられるまちづくりを）、12（持続可能な生産消費形態を確保する）、17（パートナーシップで目標を達成しよう）に合致する取り組みである。

③学生が参画する地域レジリエンスの観点：防災・危機管理を学ぶ学生たちの参加（支援金の価格設定といった仕組みづくり、小中学校・企業・赤十字・NPO・フェーズフリーの議員団・SC・シンポ等での

説明や広報活動)は教育、地域連携、市民ネットワーク、危機管理学との接点など多様な意義がある。(注4)

#### 4. 活動の工夫と取り組みに対する評価

活動を開始した令和3年に、以降のOSUSOWAKEプロジェクトをより良いものにするため、身近な本学学生たちに対して理解度や関心度を調査した。  
 対象：千葉科学大生1年生(200名(内、留学生47名))  
 調査方法：説明を受けた学生にQRコードを配り、ネット上でアンケートに回答(必修科目「キャリアデザインI」という必修科目の冒頭で実施)  
 結果：関心を持った学生は約70%、しかし実際に参加したい学生は約22%と低い。理由としては金額や物品に必ずしも納得してない。仕組みの内容は96%の学生が理解でき、かつ約70%が関心がある。つまりOSUSOWAKEは

仕組みが分かりやすく魅力があるプロジェクトであることがわかる。興味、関心を持った心情としては「助け合いの精神に共感した」が過半数を占めた。つまりOSUSOWAKEは助け合いの精神「共助」が主な魅力である。留学生だけで見ると、約80%は「関心がある」が「実際に参加したい」学生は6%であり、理由は理解不足である。金額に関して、2000円(注：最初は2000円で設定)がちょうどよいが74%を占め、外国人にとっても合理的な値段であると言える。

この調査から、OSUSOWAKEには大きな魅力があるため仕組みをしっかりと知ってもらうことで参加する人が多くなるという仮説を持ち、以降の本格活動に繋げていった。

OSUSOWAKE参加者にこの取り組みについてコメントをいただいたものの一部を図5に示す。

(2022年7月イオンモール銚子会場にて)

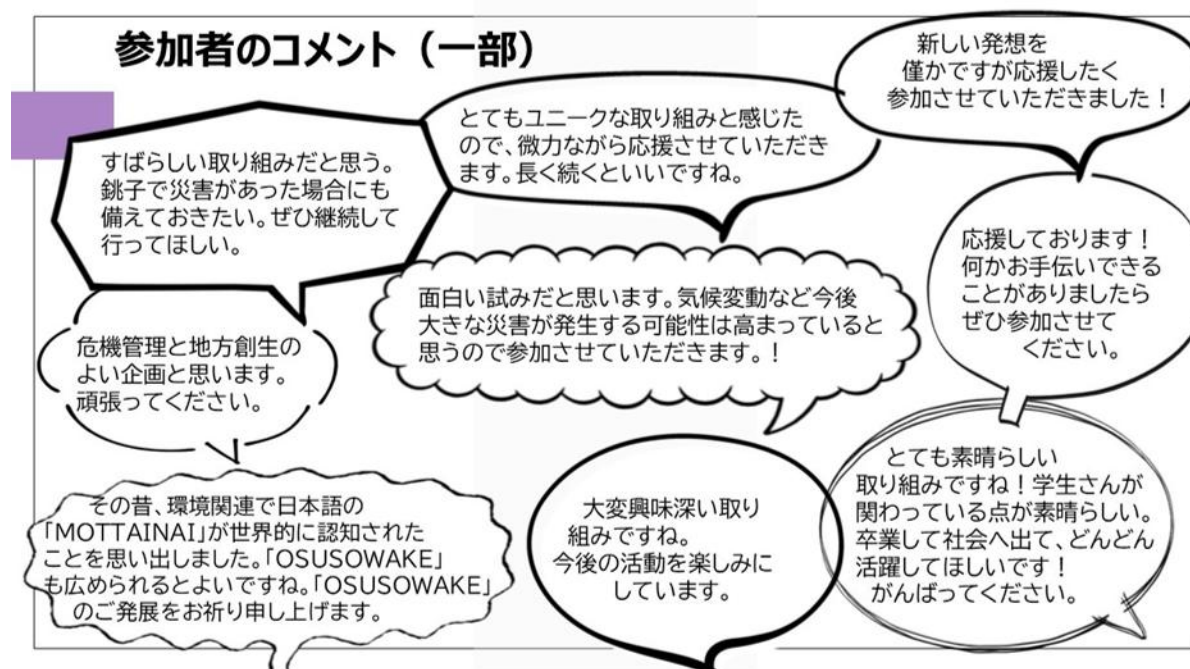


図5 参加者のコメント (一部)

OSUSOWAKEは、公的機関からも評価をいただいているのでそれを示す。

- ・令和3年「ちばコラボ大賞(千葉県知事賞)」受賞(注5)

概念構築だけではなく実際に実践していること、浸透が難しい寄付制度について「おすそわけ」というかたちで寄付意識の醸成を目指し、地域でのきめ細かい連携が

できていることを評価いただいた。

- ・令和7年「第13回食品産業もったいない大賞」(農林水産省大臣官房長賞)(注5)

個人の防災意識を高め、「被災地の支援」と「食品事業者の食品ロス削減」を連携させる新しい発想の取り組みであることを評価いただいた。

## おわりに

3. 11 当時、小学生で実際に被災した学生たちが参加し取り組んできたこの OSUSOWAKE は、彼らの熱い想いと大学で学んだ専門的な知識が融合したものであり、全国に「やさしさの連鎖」を広げることができると考える。全国の各地機で同様のシステムができていくことを我々は強く望んでいる。

注 1 銚子円卓会議は 2013 年度千葉県「地域コミュニティ活性化支援事業」を契機に発足した、多様なまちづくりの主体が連携する協議体。2015 年(平成 27 年)6 月 10 日、銚子市との「銚子まちづくりパートナーシップ協定」の締結に基づき、地域資源である「ヒト」「モノ」「コト」「カネ」の発掘・育成・架橋によって、協働のまちづくりを推進し、魅力と活力あふれる地域社会の実現を目指す中間支援団体としての活動を、以下の 3 つの事業を中心として展開している。①この指とまれ!プロジェクト(非営利組織への寄付活動 市民活動の可視化・活動者の相談や紹介など)②DELUKUI(デルクイ)(概ね 10 代～20 代前半のキャリア教育の支援・個人と地域(挑戦と応援の風土)をつなぐキャリア開発プログラムの実施)③OSUSOWAKE(おすそわけ)(自助と共助と公助を結ぶ防災活動の推進・多様な企業、他自治体とのつながりづくり・地域資源の循環による創造的な地域事業の創出)

注 2 平成 30 年版防災白書の「自助、共助、公助の対策に関する意識」の調査結果では、2002 年から 2017 年の間に、公助ではなく、共助または自助に重点を置いた対応をすべきと考える人が増加していることが示されており、OSUSOWAKE はそれも意識した。

注 3 OSUSOWAKE では 3 つのパートナーシップをもとに、事業を推進している。①ビジネスパートナー：備蓄品企業のごことで、お米と干物の 2 社でスタートし、現在は 8 社に増えている。②エリアパートナー：もしもの時に支援させていただく地域を指す。銚子と縁の深いことから(「稲むらの火」の濱口梧陵)、和歌山県有田郡広川町がエリアパートナーの一つとなっている。③サポートパートナー：OSUSOWAKE の理念と取り組みに共感いただき広報活動及び持続可能な運営へご協力いただける企業や団体様を指し、元金融機関である銚子信用金庫及び銚子商工信用組合が、窓口から OSUSOWAKE の参加費を振り込む場合は、手数料無料といったサポートを行っていただいている。

注 4 毎年、千葉科学大学の文化祭である青澄祭におい

て「OSUSOWAKE」シンポジウムを開催している。各回のテーマは、2022 年：「Sustainable 時速可能な・・・」、2023 年：「災害と食～いつもの食、もしもの食～」。2024 年：石川県珠洲市の今を知りレジリエントな人が育つすこやかな地域社会を考える」。2025 年：「共助のローリングストック 2.0 OSUSOWAKE シンポジウム『共創型社会の貢献』」であり、海外を含む多方面の関係者ゲストを招聘し開催している。年間備蓄の期日はこのシンポジウム開催日を概ね起点と締切日としている。

注 5 千葉コラボ大賞は、千葉県が実施している表彰制度であり、県内の NPO(市民活動団体)、地縁団体、社会福祉協議会、学校・大学、企業、行政機関等の多様な主体が連携して地域の課題解決に取り組む事例の中から、他のモデルとなる優れた事例を「ちばコラボ大賞(千葉県知事賞)」として表彰するもので令和 7 年度で 15 回の歴史を持つ。

注 6 「食品産業もったいない大賞」は公益財団法人食品等流通合理化促進機構が主催、農林水産省が協賛して食品産業の持続可能な発展に向け、「省エネルギー・CO2 削減」「廃棄物の削減・再生利用」「教育・普及」等の観点から環境対策に取り組み、顕著な実績を挙げた食品関連事業者等を表彰する取組みで 13 回の歴史を持つ。